

日本語ボランティア養成における協働，自発を目指す授業デザイン

Class Design that Aims at Encouraging the Participant's Cooperation and Voluntary in Japanese Volunteer Training

渡部真由美（日本学生支援機構東京日本語教育センター）

WATANABE Mayumi

(Tokyo International Exchange Center, Japan Student Services Organization)

要 旨

日本語ボランティア養成講座において，自ら目の前の参加者に合う教材や活動を創造していくボランティアを養成するべく改善を重ねてきた。実践3年目に行った養成講座では，初級日本語での例文作成，模擬授業教案作成等において，受講生同士で考えさせるフィードバックを取り入れる工夫を行った。その結果，受講生同士の連帯意識が形成され，各自の頭を使って考え，活動しようとする自発的な取り組みがみられた。

In the Japanese Volunteer Training courses, considerable improvements were seen when volunteers voluntarily performed an activity that suited participants. In the training course that the author conducted, participants pooled their ideas in a group when formulating teaching plans. Here, feedback was taken regarding whether this activity stimulated the development of the participants. This helped form a sense of solidarity among the participants, and also highlighted the approach of the participants to voluntary activities.

【キーワード】日本語ボランティア養成，協働，自発，フィードバック

1. はじめに

筆者は2007年度より東京都内のボランティア日本語教室で講師を務めている。講師業務のひとつは，初心者日本語ボランティアのための「日本語ボランティア養成講座講師」であり，もうひとつは，養成講座修了生が活動を行う日本語教室においてコーディネータ業務を行う「日本語教室講師」である。

日本語教室には，来日目的，国籍，年齢，学歴等様々なバックグラウンドを持つ参加者がやってくる。それらの参加者は，日本語が全くできないので少しでも話せるようになりたいというものから，職場では日本語を話すチャンスがないため話す機会を求めてくるもの，日本人の配偶者を持ちながら家族以外の話し相手や家庭以外の居場所を求めてくるもの，今ある日本語力をさらにブラッシュアップしたいというものまで実にさまざまである。日本語ボランティアは，このように多種多様なニーズを持った参加者を相手にするため，相手の状況，ニーズを的確に把握し自らが支援の内容と進め方を組み立てられる「自律的サポーター」（稲谷・種村2009）としての役割が求められる。

筆者も日本語ボランティア養成講座の講師を務める中で，目の前の参加者に合わせて，自ら考え，教材や教室活動を創造していく自発性を持つ日本語ボランティアを養成するべく改善を重ねてきた。本稿ではこの考えに沿った筆者の取り組みを紹介する。分析に際して

は、日本語ボランティア養成講座受講生の日本語教室での活動ぶりを定期的に観察できるという講師の利点を生かし、養成講座から日本語教室までの日本語ボランティアの取り組みまでを一連の流れとしてとらえる。そのうち日本語ボランティア養成講座については、受講生の取り組み姿勢と意識、受講生同士の協働作業を取り入れた教案修正作業に焦点をあてて記述する。記述にあたっては、養成講座授業記録、日本語教室観察時の筆者のメモ、日本語教室学期終了時のアンケートなどのデータを用いる。

2. 日本語教室

2-1. 概要

日本語教室について概要を述べる。この日本語教室は、助言者である講師のもと日本語ボランティアが参加者に対して日本語支援を行うものである。1回の教室は2時間で、週2回行われる。1年は3学期制となっており、各学期は全部で22回ある。昼の教室と夜の教室があるが、筆者はもう1人の講師とともに、夜の教室において日本語教育の知識と経験を持つ専門の講師を務めている。毎回の授業には、ボランティアおよび参加者それぞれ約10～15名のほか、教室巡回および助言を行う講師が1名、事務手続き担当の区役所職員が1名出席する。教室受講の際には、学期ごとの受講料2,000円のほか、申込時に教科書および問題集代として3,500円が必要となる。対象は日本語初級レベルのもので、申込の際に講師がレベルチェックを行い、ボランティアと参加者のマンツーマンペア、あるいは、2～4名程度のグループを作成する。ペアおよびグループは、参加者が日本語教室に来ている間は、半固定となっており、双方の長期欠席やメンバー交代の希望がない限り、原則的に毎週同じメンバーで進められる。教室では、『新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』（以下、新文化初級）を用いながら各ボランティアが文型導入、練習、会話を進める。2時間の進め方は、各ボランティアに一任されており、参加者のニーズやボランティアの裁量によって異なる。雑談を多く取り入れる場合もあれば、参加者の仕事先で使われる日本語の確認をしたり、日本人配偶者や子供との会話で使う日本語を練習したり臨機応変に対応している。各参加者には、学習記録をつけるファイルが用意されており、毎回の教室終了時に、ボランティアがその日に行った内容や参加者の日本語の問題点をシートに記入することになっている。

2-2. 夜の教室運営方針

近年、日本語ボランティアについては、「コミュニケーション」や「内容」を重視した「対話中心の活動」が重視され、「文法に限らず、『教える』ことをボランティアに要求するべきではない(御館他2010)」といった考え方が提唱されている。この日本語教室は、文型シラバスである『新文化初級』を用いながらも、「教える」ことのみこだわらず、教科書中の文型や会話を足がかりに日本での日常生活に必要な日本語を練習し、そして雑談への発展を目標とするものである。

2-3. 夜の教室メンバー

夜の教室参加者の国籍は、中国、韓国、モンゴル、アメリカ、インド、ネパール、フランス、オーストリアなどで、年齢は20代から60代である。職業は、英会話講師、調理師、

主婦、建設業者、芸術家など多岐にわたる。2007年度以降の傾向として、日本人を配偶者に持つものや永住ビザを持つものなど、在日歴が長い人が増加している。主婦が多く参加する昼の教室に比べて、仕事を持つものが多いため、仕事で必要な日本語習得を目的とする参加者が多いと思われる。日本語の習得がある程度進むと、日本語能力試験2級から4級の過去問題を使った学習や試験対策を希望するものもいる。

ボランティアについては、同様に仕事を持つ人が多く、年齢は20代から退職後の70代前半まで幅広い。

2-4. 教室全体で行う活動

この日本語教室の活動の中心は教科書を用いた学習だが、それ以外にこの教室を特徴づけるものとして、教室全体で行う活動がある。教室全体で行う活動として、学期に1～2度日本文化に関する行事を、そして外部のスピーチコンテストの時期に合わせて作文集作成を行ってきた。これまで行った行事は、七夕、秋の文化祭、年賀状書き、節分、ひな祭りなどである。夜の教室では、日本語そのものの勉強を進めたいという希望を持つ参加者が多いことから、2時間のうち半分の時間は教科書を用いた学習をし、残りの半分の時間で簡単な行事紹介をしている。行事紹介とは、七夕では絵を用いた七夕の紹介と短冊書き、文化祭では歌の練習、節分では教室での豆まきである。昨年度は、行事と同時に、日本語を用いたゲームを教室全体で行った。評判の良かったゲームは、ボールを投げながら質疑応答をする「ボールでコミュニケーション（注1）」、「伝言ゲーム」、「数字ビンゴ」である。「伝言ゲーム」は、2チーム対抗で行い、与える文を徐々に長くしていった。最後に一番後ろの人が聞いた文を黒板に書いてもらったところ、珍回答が続出し、特に日本語ができる人はお腹を抱えて喜んでいた。この活動は、参加者、ボランティア双方から好評を得た。参加者の中には、家庭に戻ってからも「（伝言ゲームや豆まきが）とても楽しかった」と言っているものがあり、ボランティアも学期最終日の修了式やアンケートにおいて、「みんなでできるとてもいい活動だ」と述べている。

3. 日本語ボランティア養成講座

3-1. 概要

次に、初心者を対象に行った日本語ボランティア養成講座の概要を述べる。この養成講座は、初めて日本語ボランティアに携わる人を対象とした「外国人の日本語学習を手助けするボランティアを養成する講座」であり、「日本語教室で実際に使用している教科書（初級）を使用して、日本語の教え方を実践的に学ぶ」ものである。この講座の修了が、日本語ボランティアに登録するための条件となっており、受講後に「日本語教室」「日本語サロン」（注2）において活動することを前提に実施されている。受講料は、前期（7～8月）が13回、後期（12月）が5回で、前期講座開始時に教科書代を含む4,000円が必要となる（注3）。夜の養成講座では、前期は『新文化初級Ⅰ』を、後期は『新文化初級Ⅱ』を軸に日本語ボランティアに必要となる事柄を扱っている。

3-2. 改善の背景

筆者は2007年度から、もう一人の講師とともに養成講座講師を務めてきた。講師を始め

た当初は、できるだけ多くの文型を扱うことに重点を置き、主に教師主導の講義型で進めていた。しかし、毎回受講生が記入する感想質問シートにおいて「(先生がモデルとして見せた導入は)すごいと思うが、自分が同じようにできるかわからない」といった不安を訴えるものがあつたことから、講師が一方向的にモデルを提示するだけでは不十分ではないかと感じるようになった。教師の成長について述べた岡崎・岡崎(1997)は、「〈良い教師〉がどのように教えているかを知るだけでは、個々の教師が直面する高度に複雑な教育・学習過程の現象を理解し、そこにある問題や学習者の多様性に対応していく教育を実現することは難しい」とし、各教師が主体的に成長することの重要性を主張している。さらに「型にはまった規範をトップダウン方式で示すようなやり方」は、「自律的学習、自律的研修の道を閉ざす」ものであり「教育の改善の機会」を奪ってしまうため、教師の成長を重視する研修指導者は、そのようなやり方をとるべきではないと述べている。この養成講座は、報酬を得て働くプロの日本語教師を養成するものではないが、自律的かつ継続的に成長する日本語ボランティアの養成が目標であることから、岡崎・岡崎(1997)の主張を取り入れることにした。

養成講座では、以下の目的から「協働学習」を取り入れて、例文や教案の検討および修正作業を行った。目的の1つめは池田(2009)が述べているように「社会に根付いているトップダウン・システムにおける情報や作業、行為など縦方向の流れだったものを横に変え、そこにかかわる人間すべてを主体とみなし、さらにそれらに双方向のダイナミズムを捉えること」である。この講座においては、講師がすぐに改善案を提示するのではなく、受講生を主体とみなし、受講生同士の双方向のフィードバックを促進することで、お互いにアイデアを出しながら修正していくよう促した。目的の2つめは、秋田(2010)が協働学習の利点の一つとして挙げているように、やりとりをすることで参加への動機を高め、同じ意見や活動を共有することによって、グループ(徒党)意識を高めることである。これを目的としたのは、養成講座受講中に連帯意識を形成することで、講座修了後の日本語教室において、進め方に関するアイデアや悩みを気軽に話せる関係を作りたいとの思いからである。

3-3. 日本語ボランティアとプロの日本語教師との違い

これまで述べたように、この日本語教室は多種多様な目的を持つ参加者を相手にボランティアが進めることになっており、報酬を得て教えるプロの日本語教師との違いは何かという疑問が生じてくる。三木(2003)は、日本語ボランティア養成講座について「日本語を『教える』ボランティアを目指させる講座を受けた結果、外国人を共生社会における隣人としてではなく、外国人=学生=権威に従うものにとらえる意識が芽生えることはないだろうか」と疑問を呈す一方で、日本語ボランティアには「限られた時間内で何をすべきか見極められる力が要求され」、「日本語を勉強する人のために集まってくる人たちのニーズに応えようと思えば思うほど、専門的な知識がどうしても必要になってしまうのが現状」と述べている。この日本語教室においては、日本語ボランティアが文型導入からするため、ある程度の日本語知識ややりとりのテクニックが必要となり負担が重いともいえる。しかし日本語ボランティアにすべての文型を教えられることを求めているわけではない。ボランティアが質問に窮する場合はヘルプの声が挙がり、その日に出席している講師が手

助けに行く。また好ましいことではないが、連絡なしに遅刻、欠席をするボランティアもいれば、講師がペアやグループとしてあてた参加者を相手のニーズや性格、日本語レベル、話題等の不一致を理由に断るボランティアも存在する。以上のように、自身の個人的都合や能力による活動が許される点がプロの日本語教師との境目だといえるのではないか。

3-4. 講座内容

以下に、2009年度養成講座で行った内容を取り扱った順序にしたがって挙げ、本稿の目的に関連するものを詳述する。

- (1) 国語教育と日本語教育（初級）の違い（学習目的、教科書）
- (2) 外国人と接した経験の振り返り
- (3) 望ましい日本語ボランティア／困った日本語ボランティア
- (4) 先輩ボランティアによる日本語教室体験談
- (5) 絵カード使用法紹介、フラッシュカード作成・受講生作成カード紹介
- (6) 既習語を用いた会話
- (7) 例文作成と修正
- (8) 先輩ボランティアによる日本語模擬授業（～があります/います）
- (9) 中国語直接法授業受講（数字の読み方）
- (10) 模擬授業教案作成およびグループでの修正
- (11) 養成講座受講生を対象にした模擬授業および模擬授業観察

3-4-1. 外国人と関わる自分の経験を振り返る

講座の導入部分において、日本語ボランティアに興味を持った経験をグループで振り返ってもらった。この活動では、①ことばができない人を助けたことがあるか、②ことばができなくて困っているときに助けてもらったことがあるか、③困っている人を助けたかったけれど助けられなかったことがあるかという3つの問いに対して、グループで話し合わせた。経験として多かったのは、海外在住時、あるいは旅行等による短期滞在時に遭遇したエピソードがきっかけであるというものである。また日本国内で外国人に接したエピソードを語るものもいた。

3-4-2. 望ましい日本語ボランティアとは

今後活動を始める日本語ボランティアについて具体的にイメージしてもらうため、望ましい日本語ボランティアについてグループで考える機会を設けた。ここで挙げた問いは、①文法説明でどんな日本語を使うとわかりやすいか、②外国人の間違った日本語を訂正すべきか、③日本文化や習慣の説明においてことば以外にどんな工夫ができるか、④外国人と価値観が違ふと感じたときどうするか、⑤日本語教室で日本語以外の言語を使うことについてどう思うかである。

ここでは、受講生から挙げた回答のうち特に印象に残った③について紹介する。グループで挙げた意見はおおむね以下の2種のものであった。

a) コミュニケーションに支障が生じた際の対応

やさしい日本語で説明する。教室の中にいる日本語が上手な人にその国の言語で説明してもらおう。お互いに学び合うことにつながる。

b) 視聴覚補助の利用

教科書の絵を見せる。ホワイトボードに絵を書く。パンフレット、インターネットなどの視覚的にイメージが伝わるものを見せる。

まず前者については、コミュニケーションに支障が生じた際、ボランティアだけの力で解決しようとするのではなく、参加者同士の助け合いを提唱している点が評価できる。地域の日本語教室におけるボランティアと参加者との関係については、「近年は、地域の日本語教室の在り方の活発な議論の中から、『教える・教えられる』関係が固定するような活動は適切ではないという考え方が聞かれるようになり、双方向的な関係が意識され始めている(柴田2003)」。このような声がある中で、この日本語教室ですでに活動している日本語ボランティアの中には、これまで受けてきた伝統的な学校教育の影響からかボランティアと参加者との間に「教える・教えられる」という関係を持ち込みがちなものがある。長い間、身に付いた教育観をすぐに変えることは難しいが、養成講座受講生の中から参加者同士の学び合いが挙げたことは今後の活動に何かしらよい影響を与えてくれるのではないかと期待できる。

後者については、ことばだけの説明に終始するのではなく、教科書や自作の絵、インターネット上の情報が役立つことに気が付いている点が評価できる。こういった絵や図、写真等の効果的利用は、教室活動においてすべてのボランティアができていくわけではない。日本語がわからない参加者を相手に、ことばでの説明に頼りがちなボランティアがいる中で、このようなアイデアは大いに奨励できる。日本文化や習慣の説明だけでなく、文法や語彙の説明場面においても積極的に利用してもらいたい方法である。

3-4-3. 例文作成と修正

次に、養成講座における受講生が作成した例文に対するフィードバックを紹介する。以下は、形容詞をつなぐ文型「～くて～」、「～が～」を用いた例文をグループ内で検討し合ったあとに教室全体で行った講師からのフィードバックの様子である。

まず、「佐藤さんの部屋は明るくて、きれいです。」という例文についてである。この文では、どこの誰だかわからない佐藤さんを使うのではなく、知人など身近な人に変更することでより現実的な文になるのではないかと助言した。次に「A：旅行はどうでしたか B：暑かったですが、楽しかったです。」という応答についてである。この応答では、Aが何の前提もなく、旅行はどうだったかと発話していて唐突に感じられるため、前提文脈として「B：先週の土曜日に旅行へ行きました。」という発話があったほうが良いのではないかとアドバイスを与えた。

3-4-4. 模擬授業教案作成およびグループでの修正

以下は、形容詞をつなぐ文型「～くて～」，「～が～」を扱う模擬授業教案修正の様子である。

模擬授業教案作成は自宅課題として課した。教案作成においては、文型の意味を理解させるための導入、機械的な練習、身近な事柄についてのQAの順で組み込むように指示した。養成講座においては、各自が作成してきた教案をグループで見せ合い、講師の助言を受けながらグループで教案を修正する機会を設けた。あるグループは、1人の受講生が前件と後件を連結する練習のための文字カードを作成してきた。文字カードには形容詞が表す意味によって、笑い顔のマークと泣き顔のマークが付されていた。講師が「わかりやすく、とてもいい練習になる」とコメントした上で、次のステップとして、「前件のみを見せて、後件を考えさせる練習ができるのではないか」とアドバイスをしたところ、教案に修正が加えられた。その後、グループ代表による模擬授業では、他のグループの手本となる模擬授業をすることができ、模擬授業終了後にはメンバーでガッツポーズをし合っていた。

4. 養成講座修了生の日本語教室における様子

次に養成講座受講生の取り組みや意識の変化を考察するため、2009年度ボランティア養成講座受講生を取り上げ、養成講座から日本語教室までの様子を述べる。

<Aさん>

養成講座で作成する模擬授業案は、ボランティアの問いに対して参加者が答えるという単調な繰り返しが続くもので、修正の機会を設けても、なかなか改善がみられなかった。前期養成講座終了後の日本語教室においては、約3ヶ月日本語教室に通っているQさんと組むことになった。教室では、ことばによる文型説明に時間が割かれがちだったため、Qさんが話すチャンスをもう少し作るように声をかけたところ「会話はしません。(Qさんにとっては)難しいから。」との答えであった。この頃のAさんは、日本語ボランティアを始めたばかりで気持ちに余裕がなく、Qさんの発話を増やすことにまで注意がいていなかったように思われる。しかし、その後、徐々にQさんの発話機会が増えるようになった。Qさんの日本語力が上達し少しずつ話せるようになったことに加えて、毎回Qさんと組む中でQさんの生活スタイルや仕事の環境などがわかり、Qさんが関心を持つことさらに話題をもっていきやすくなったためだと思われる。

<Bさん>

養成講座における模擬授業では、ある国の食材を袋いっぱい準備してきて、文型導入を行った。その結果、使用頻度が低く難解な語彙が頻出することになった。前期養成講座終了後の日本語教室では、日本語がゼロ初級であるOさんおよびPさんと毎回組むことになり、以下のような熱心な取り組みがみられた。まず、インターネットからダウンロードした動詞絵カードを用いていた。さらにBさんがパソコンで自作した動詞フラッシュカードは、グループごとに色分けされ、課の番号がふってあった。「きれいに作っていらっしゃるね。準備が大変ですね。」と声をかけると、「養成講座で習ったことを生かしている。一度作っておけばずっと使えるから。」との答えであった。2時間の進め方について

は、2人の参加者が話したくなるような話題を持っていき、発話を増やすための工夫がこらされていた。講師が「(Oさん、Pさんは)日本語でいろいろなことが話せるようになりましたね。」とコメントを述べたところ、「2人は教室でとても仲良くなった。日本語でメール交換も始めた。」と非常にうれしそうにしていた。

5. 養成講座の成果

2009年度養成講座は、さまざまな目的を持つ目の前の参加者に合わせて、自ら考え、教材や教室活動を創造する日本語ボランティアを養成することを目的に進めた。また、受講生同士の関係作りと仲間同士の学び合いを促進することを目的に受講生が協働的に学ぶグループ学習を取り入れた。

以下に養成講座の成果を、受講生の取り組み姿勢と教室での実践場面の観点から検証する。

5-1. 受講生の取り組み姿勢

まず、自ら考える自発性を持つ日本語ボランティアになり得たかという観点から考察する。養成講座においては、講師がグループでの検討、修正作業を促進した結果、講師からのフィードバックだけを待つのではなく、グループ内あるいは個人で進め方を考え出し、修正しようとする受講生が増加した。受講生が各自の頭を使って考え、修正するという活動は自発性の向上につながり、自ら進め方を改善していく姿勢が生まれたといえる。

次に協働的に学ぶグループ学習については、グループ内で修正作業を繰り返し、講師がグループごとにフィードバックを与えたことで、連帯意識が生まれた。グループでの話し合いが参加者間の会話のきっかけとなったと思われる。

以上の結果、例年に比べ、養成講座受講修了後の日本語教室において、自ら進め方を工夫する初心者ボランティアが増えたほか、教室内外の事柄についてボランティア同士が会話をする場面が増加した。

5-2. 教室での実践場面

養成講座を修了した受講生の日本語教室での実践においては、以下のような成果が観察された。①教材を用意するだけでなく、課ごとにファイリングしたり、簡単な教案を用意して実際の使用場면을想定したりすることで使いやすいように工夫している。②教科書の例文をそのまま用いるのではなく、目の前の参加者にわかりやすいような場面や語彙に置き換えている。③学習文型を使って答えられるような質問をいくつも準備し、繰り返し使用させることで効果的に日本語力が伸ばせるように工夫している。

6. 今後の課題

5節では、協働と自発を目指す養成講座の成果についてまとめた。しかし、こういった取り組みはすべての日本語ボランティアにみられるわけではない。また一人のボランティアでも相手にする参加者によって、そのときどきで進め方が変わり、常に相手に合わせた進め方ができるとは限らない。こういった状況の中で、コーディネータの役割を担う筆者ら講師の役目は、ボランティアと参加者のマッチングに配慮し、適宜助言を与えることで、

ボランティアができるだけ活動しやすい環境を整えることだと考える。

これまでも述べたように、「対話中心の活動」をすべきだという考えがある中で、文型を軸にしたこの日本語教室の形態は、ベストの方法とはいえないかもしれない。しかし本日本語教室は、以前よりペアやグループにおいて文型ベースで進めるスタイルで運営されてきた教室である。また、日本語がまったくわからない入門レベルの参加者が相手の場合、基本的な語彙や文型がなければ意思疎通が困難だということもある。以上のような教室の現状を考えながら、対話と交流のバランスのとれたよりよい教室のあり方を探っていきたい。

注

- (1) 中村ほか(2005)において、「さまざまな文法や言葉の勉強とともに使える汎用性の高いアクティビティ」として紹介されている。
- (2) 「日本語教室」のほかに、日本語と日本の生活習慣や文化について学びながら日本語ボランティアと交流をする「日本語サロン」が昼と夜に週に一度ずつ開かれている。「日本語サロン」は「日本語教室」と違い、日本語教育の専門の知識を持つ講師がおらず、教科書も使用していない。参加費は、学期ごとの徴収ではなく、1回参加するごとに1人100円必要である。対象は日常会話ができる外国出身者となっており、「日本語教室」受講希望者のうち初級修了の日本語力を持つ人に対しては、「日本語サロン」受講をすすめることになっている。
- (3) 夜の養成講座では、後期の養成講座開始時に『新文化Ⅱ』教科書代2500円を徴収した。

参考文献・資料

- (1) 秋田喜代美(2010)「第8章 協働学習の過程」秋田喜代美・藤江康彦『授業研究と学習過程』放送大学教育振興会
- (2) 池田玲子(2009)「8章 協働的アプローチで授業をデザインする イントロダクション」大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂編『大学の授業をデザインする日本語表現能力を育む授業のアイデア』ひつじ書房
- (3) 稲谷いく子・種村政男(2009)「仕事をする外国人をサポートするボランティアに求められるものは何か—『仕事をする外国人をサポートするためのボランティア講座』の実践より—」『2009年度日本語教育学会実践研究フォーラム予稿集』, 185-188
- (4) 岡崎敏雄・岡崎眸(1997)『日本語教育の実習—理論と実践—』アルク
- (5) 御館久里恵・仙田武司・中河和子・吉田聖子・米勢治子(2010)『外国人と対話しよう! にほんごボランティア手帖』凡人社
- (6) 柴田幸子(2003)「第5章 「地域の日本語教室活動」模索中!」岡崎洋三・西口光一・山田泉編著『日本語教師のための知識本シリーズ③人間主義の日本語教育』凡人社
- (7) 中村律子・浅見かおり・金子広幸・宮崎妙子(2005)『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ50』アスク
- (8) 文化外国語専門学校(2000)『新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』凡人社

- (9) 三木由里子（2003）「第4章 日本語ボランティア養成講座を考える—よりよい日本語支援活動を目指して—」岡崎洋三・西口光一・山田泉編著『日本語教師のための知識本シリーズ③人間主義の日本語教育』凡人社
- (10) 渡部真由美（2010）「日本語ボランティア養成講座実践報告—パートナー兼コーディネータとなる人材育成を目指して—」『日本語教育方法研究会誌』17-1, 8-9